

コカと日独関係：第二次世界大戦期を中心に

熊野，直樹
九州大学大学院法学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/1903826>

出版情報：法政研究. 84 (3), pp.319-346, 2017-12-14. Hosei Gakkai (Institute for Law and Politics) Kyushu University

バージョン：

権利関係：

コカと日独関係 ——第二次世界大戦期を中心に——

熊 野 直 樹

はじめに

1 コカとドイツ

- (1) ペルー産コカからジャワ産コカへ
- (2) 第二次世界大戦期ドイツにおけるコカイン

2 第二次世界大戦期における日独コカ交易とコカ樹栽培

- (1) 日独コカ交易
- (2) 日本におけるコカ樹栽培—硫黄島を中心に—
- (3) 日本軍政下のオランダ領東インドにおけるコカ樹栽培と交易

3 第二次世界大戦末期における日独コカ交易

- (1) ドイツ滞貨としてのコカ葉
- (2) ローゲス商会と交易営団の売買契約
- (3) 戦後におけるコカ葉のゆくえ

おわりに

はじめに

19世紀の阿片戦争以来、阿片は主要な世界商品の一つとなった。20世紀前半における一連の麻薬の国際規制に関する条約⁽¹⁾によって阿片が国際的な禁制品になっても、依然として阿片は欧亜関係においては世界商品であり続けた。こうした事情は、第二次世界大戦勃発以降も実は変わらなかった。

筆者がこれまでの一連の研究で明らかにしてきたように、第二次世界大戦中、ナチス・ドイツと「満洲国」との間では、国家による一元的な統制の下、阿片の交易がなされていた。大戦末期においては、ナチス・ドイツは阿片の大半を「満洲国」から輸入していたのであった。このように第二次世界大戦においては、阿片をめぐるナチス・ドイツと「満洲国」は密接な関係にあった。近年、ドイツでは第二次世界大戦と麻薬との関係が注目されている⁽⁴⁾。しかし、そこではナチス・ドイツが麻薬の原料をいったいどこから輸入したのか、という視点が欠落している。オーラーの研究によってヒトラー (Adolf Hitler) がオイコダル (Eukodal: 別名オキシコドン) という麻薬を主治医モレル (Theodor Morell) によって投与され、麻薬中毒になっていたことが実証されたが、このオイコダルの原料はまさに阿片である。モルヒネやヘロインの原料もまた阿片であり、ナチス・ドイツは、大戦中、鎮痛剤のモルヒネを大量に使用し、必要としていた。こうしたモルヒネの原料である阿片を、ナチス・ドイツは「満洲国」から輸入していたのである。それ故にこれまで筆者は独亜関係において、とりわけ「満」独間の阿片交易を主たる研究対象としてきたのであった。そのため阿片以外の麻薬は、対象外であった。

しかし、第二次世界大戦期においてナチス・ドイツは、阿片と同様に国際的な禁制品であったコカ⁽⁶⁾を直接日本から輸入していた。しかも従来殆ど一般には知られて

(1) 「ハーグ国際阿片条約 (万国阿片条約)」(1912年1月23日調印、ハーグ)、「第1阿片会議協定及議定書」(1925年2月11日調印、ジュネーヴ)、「第2阿片会議条約及議定書」(1925年2月19日調印、ジュネーヴ)、「麻薬の製造制限及分配取締に関する条約」(1931年7月13日調印、ジュネーヴ)、「阿片吸食防止に関する協定」(1931年11月27日調印、バンコク)、「危険薬品の不正取引の防止に関する条約」(1936年6月26日調印、ジュネーヴ)。

(2) 熊野直樹「バター・マーガリン・満洲大豆―世界大恐慌期におけるドイツ通商政策の史的展開―」熊野直樹・柴尾健一・山田良介・中島琢磨・北村厚・金哲『政治史への問い／政治史からの問い』法律文化社、2009年、147-174頁；同「ナチ阿片・交易営団・GHQ―第二次世界大戦末期のドイツ滞貨のゆくえ―」『法政研究』第81巻第3号、2014年、49-78頁；同「阿片と日華賠償問題」『法政研究』第83巻第3号、2016年、77-114頁；同「第二次世界大戦期の『満』独通商関係―満洲大豆から阿片へ―」田嶋信雄・工藤章編『ドイツと東アジア 一八九〇―一九四五』東京大学出版会、2017年、653-699頁。

(3) 本論では、国家によって一元的に統制された貿易を交易と呼ぶことにする。当時の日本における貿易と交易の区別については、林大作編『交易営団への理論と実践』東亜書林、1943年を参照。

(4) Behrens, Roman: „Vernichten und Heilen“ – Ein Forschungsbericht zur Militärmedizin des Zweiten Weltkriegs, Norderstedt 2012; Bollinger, Nicolas: *Pervitin im nationalsozialistischen Deutschland. Untersuchung anhand der Unterstellung unter das Opiumverbot vom 12 Juni 1941*, Saarbrücken 2016; Eckart, Wolfgang U./ Alexander Neumann (Hg.): *Medizin im Zweiten Weltkrieg. Militärmedizinische Praxis und medizinische Wissenschaft im »Totalen Krieg«*, Paderborn 2006; Holzer, Tilmann: *Die Geburt der Drogenpolitik aus dem Geist der Rassenhygiene. Deutsche Drogenpolitik von 1933 bis 1972*, Norderstedt 2007; Pieper, Werner (Hg.): *Nazis on Speed. Drogen im 3. Reich*, Löhrbach o.J. (2002).

(5) Ohler, Norman: *Der totale Rausch. Drogen im Dritten Reich*, Köln 2015.

はいないが、大戦中日本におけるコカの主要な生産地の一つが硫黄島であった⁽⁷⁾。第二次世界大戦中、ナチス・ドイツが主に使用した麻薬の一つであるコカインの原料であるコカ葉の一部は、日本から輸入されていたのである。大戦末期においては、ドイツが購入したコカを日本が逆に輸入していたのであった。そこで本論では、従来全く知られていなかった日独のコカ交易の実態を明らかにしたい。これまで阿片に比べて殆ど注目されてこなかったコカを素材に日独関係を歴史的に考察することによって、従来の分析視角とは異なる日独関係史を提示することが本論の主たる目的である。

本文に入る前に、コカについて簡単に説明しておこう。コカインはコカ樹の葉から抽出される。コカ樹は、正式には「コカノキ *Erythroxylum coca*」と称される。コカ樹は、南米原産でペルー、ボリビアやインドネシアなどで栽培される低木である。その葉（コカ葉）は、「(-) -cocaine」を主成分とし、その他数種のトロパン（tropane）型アルカロイドを含む。コカ葉の市場品には主に三つの栽培品種のものが知られる。すなわち、ボリビアコカ葉、ペルーコカ葉及びジャワコカ葉である。コカ葉は局所麻酔薬の塩酸コカインなどの製造原料であり、コカインには習慣性がある⁽⁹⁾。その強い向精神作用ゆえに精神の混濁または錯覚をおこし、知覚知能を麻痺させる。これをコカイン酩酊（Cocainrausch）という。コカの愛用者をコケロス（Coqueros）ともいい⁽¹⁰⁾、現在でも世界各国で様々な深刻な社会問題を引き起こしていることは周知の通りである。

かつてコカ葉は、清涼飲料水のコカ・コーラに配合されていた。アメリカ合衆国

⁽⁶⁾ 本論では、コカ葉、コカ樹、コカインを総称してコカと呼ぶことにする。

⁽⁷⁾ もっとも硫黄島研究者にとっては、硫黄島でコカが生産されていたことは周知のことである。例えば、石原俊「そこに社会があった—硫黄島の地上戦と〈島民〉たち—」『Mobile Society Review 未来心理』第15号、2009年、30-31頁を参照。

⁽⁸⁾ グーテンバーグ編集の代表的で実証的なコカの事例研究においても、日本とコカとの関係やドイツとコカとの関係についての歴史的考察はなされても、第二次世界大戦期の日独のコカ交易とその実態については全く言及されていない。Gootenberg, Paul (ed.): *Cocaine. Global Histories*, Routledge: London/New York, 1999. スコットとマーシャルによる著名なコカイン・ポリティクスの研究は、第二次世界大戦後のアメリカの対中米政策とコカイン密輸との関係に注目したものであり、そもそも大戦期の日独コカ交易は対象外である。Scott, Peter Dale / Jonathan Marshall (ed.): *Cocaine Politics. Drugs, Armies, and the CIA in Central America*, Updated Edition with a New Preface, University of California Press: Berkeley/Los Angeles/London, 1998. 管見の限り、第二次世界大戦と麻薬との関係に着目した研究において、大戦期の日独コカ交易に言及した研究は見当たらない（当該研究の詳細については、註2の各拙稿に記載した内外の研究文献を参照されたい）。

⁽⁹⁾ 奥田拓男編『資源・応用薬用植物学』廣川書店、1991年、117頁。

⁽¹⁰⁾ 牛窪愛之進『魔薬読本—阿片・モルヒネ・ヒロボンの生態—』六幸社、1955年、44-45頁。

のジョージア州アトランタの薬剤師が、コカ葉、カフェイン、そしてコラ子の抽出物を加えたシロップを“Coca Cola”と名づけ、これにソーダ水か他の炭酸飲料を加えて売り出したことがその始まりである。その後、キャンドラー(Asa Griggs Candler)がコカ・コーラの製造権を譲り受け、単に清涼飲料としてのみ広告し販売した。1903年までこの飲料にはコカインが含まれていた⁽¹¹⁾。

ハーグ国際阿片条約の定義によると、コカインは以下のように定義されている。「『コカイン』トハ『エリトロキシロン・コカ』葉ノ主要ナル『アルカロイド』ニシテ $C_{17}H_{21}NO_4$ ノ化学式ヲ有スルモノヲ謂フ」。こうしてコカインは製造・販売及び使用が制限され、その輸入者に対する認許制が批准国に義務付けられた。また製造及び取引に対する監督も批准国に課せられ、輸入の認許を有しない者への輸出も禁じられた⁽¹²⁾。このように20世紀に入るとコカインもまた阿片と同様に国際的な禁制品となったのであった。

コカに関する以上の予備知識を踏まえたうえで、以下では、コカを素材に日独関係を歴史的に考察していくことにしよう。まずは、コカとドイツとの関係について検討していく。

1 コカとドイツ

(1) ペルー産コカからジャワ産コカへ

ドイツにおいてコカインは、19世紀後半以降主にメルク(E. Merck)社によって製造されていたが、その原料であるコカ葉は主としてペルーから輸入されていた。表1が示すように、1890年代に入るとメルク社製のコカインの生産量は飛躍的に伸び、1897-1898年以降は、1,500キログラム以上を生産するまでになる。しかも19世紀後半においては、ドイツはハンプルクを通じてコカ葉を主にペルーとボリビアから輸入していた。というのも、オランダによってジャワ産のコカ葉の輸入が阻まれ

⁽¹¹⁾ 船山信次『アルカロイドー毒と薬の宝庫ー』共立出版株式会社、1998年、129頁。なお、本書では“A. G. Chandler”と表記されているが、名字はコカ・コーラ社の公式サイトでの表記に従った(www.coca-colacompany.com; 2017年8月15日最終閲覧)。

⁽¹²⁾ 「ハーグ国際阿片条約及国際阿片会議最終議定書(大正九年一月十日官報)」『阿片・麻薬に関する国際条約集 綴』(謄写版、九州大学文系合同図書館蔵)。

ていたからであった。⁽¹³⁾ 当時アムステルダムとハンブルクはコカ葉の輸入をめぐって競合関係にあった。

表1 メルク社製粗製コカイン生産量とドイツにおけるペルー産コカ葉の輸入量及びペルー産コカ葉によるドイツの粗製コカイン生産総量（1879-1900年）（単位kg）

年	メルク社製生産量	ペルー産コカ葉	ペルー産コカイン生産総量
1879-80	0.05	25	
1880-1	0.05	25	
1881-2	0.09	58	
1882-3	0.30	138	
1883-4	1.41	655	
1884-5	30	8,655	
1885-6	70	18,396	
1886-7	257	3,629	389
1887-8	300		375
1888-9	303		350
1889-90	511		595
1890-1	557		585
1891-2	436		434
1892-3	505		558
1893-4	626		656
1894-5	645		683
1895-6	791		1,801
1896-7	831		870
1897-8	1,509		1,819
1898-9	1,553		1,832
1899-1900	1,564		1,695

出典：Friman, H. Richard: Germany and the transformations of cocaine, 1860-1920, in: Gootenberg, Paul (ed.): *Cocaine. Global Histories*, Routledge: London/New York, 1999, p.85のTable 4.1より筆者作成。

⁽¹³⁾ Friman, H. Richard: Germany and the transformations of cocaine, 1860-1920, in: Gootenberg (ed.), *Cocaine*, p.86.

表2 メルク製の粗製コカイン生産量とドイツにおけるペルー産コカ葉による粗製コカイン生産量及びジャワ産コカ葉の輸入量とジャワ産コカ葉による粗製コカイン生産量(1900-18年)(単位kg)

年	メルク製コカイン	ペルー産コカイン	ジャワ産コカ葉	ジャワ産コカイン
1900-1	1,418	1,991		
1901-2	1,886	2,116		
1902-3	2,454	2,745		
1903-4	2,157	2,821		
1904-5	2,426	2,885		
1905-6	2,146	2,487	58,967	919
1907	1,881	953	94,018	1,647
1908	3,642	1,634	220,429	3,721
1909	4,183	1,239	238,066	3,972
1910	5,241	3,151	186,127	3,183
1911	4,681	2,072	261,254	4,080
1912	6,049	1,384	422,776	6,552
1913	8,683	1,226	724,189	10,683
1914	6,212	791	487,245	7,295
1915	265		203,972	2,966
1916	44		68,380	829
1917	1,246			
1918	1,738		6,744	72

出典：Friman, Germany and the transformations of cocaine, p.90のTable 4.2より筆者作成。

ところが表2が示すように20世紀初頭(1905-1906年)にドイツがジャワ産のコカ葉を輸入し始めると、1907年にはジャワ産コカ葉によるコカイン生産量がペルー産コカ葉によるコカイン生産量を上回ることになる。1913年には、ジャワ産コカ葉によるコカイン生産量がペルー産コカ葉によるコカイン生産量の約9倍へと至る。しかも第一次世界大戦が勃発するとペルー産コカ葉の輸入は杜絶し、コカインは専らジャワ産コカ葉から生産されるにいたる(表2参照)。このように第一次世界大戦を契機にドイツ製コカインの原料のコカ葉は、ペルー産からジャワ産へと転換していたのであった。しかも1920年代には、ジャワ産のコカ葉がヨーロッパ市場を制覇するに至るのであった。⁽¹⁴⁾

それでは1920年代以降のヨーロッパ市場を制覇したジャワ産コカ葉は、どのよう

にしてジャワで生産されるようになったのだろうか。そもそもコカ樹は南米のペルーやボリビア原産である。1878年にベルギーの企業が、南米からコカ樹をオランダ領インド（ジャワ、マドゥラ、スマトラ）に送ったことがその始まりとされる。1883年にコカ樹の栽培が開始され、3年後にはオランダ領インド（ジャワ、マドゥラ、スマトラ）でコカ葉の商取引が開始された。特にジャワ産のコカ葉はペルー産に比べて多様性に富むとされる。というのは、ペルー産のコカ葉がアルカロイドを1.2%しか含まないのに対して、ジャワ産のそれは1.5%、なかには2%を含むものもあった。しかもジャワ産のコカ葉は、ペルー産に比べて約2倍のコカインを生み出すとされた。⁽¹⁵⁾

1900年まで、ヨーロッパにおけるコカ葉の主要な購入業者はドイツの製薬会社であり、ハンブルクがコカ貿易の主要港であった。しかし20世紀に入ると、グローバルなコカ貿易センターの地位をハンブルクはアムステルダムによって奪われることになる。例えば、1905年には、コカ葉1,600トンと5トン以上のコカインがペルーからハンブルク港へ輸送されていたが、1913年にはコカ葉は35トン、コカインは2.5トンへと落ち込んだのであった。⁽¹⁶⁾

1930年初頭には表3が示すように、ジャワ産コカ葉は、その約60%がオランダへ、約30%がドイツに、約7%が日本に輸出された。その後には、ドイツや日本に代わってイギリスとアメリカに輸出されることになる。第一次世界大戦以降1930年代前半までドイツは主としてジャワ産のコカ葉を輸入していたが、1930年代後半になると、ドイツはジャワ産のコカ葉の輸入自体を急減させることになる。第二次世界大戦が勃発すると、1940年にはついにドイツはジャワからのコカ葉の輸入を杜絶させた(表3参照)。

⁽¹⁴⁾ Pieper (Hg.), *Nazis on Speed*, S.47.

⁽¹⁵⁾ de Kort, Marcel: Doctors, diplomats, and businessmen. Conflicting interests in the Netherlands and Dutch East Indies, 1860-1950, in: Gootenberg (ed.), *Cocaine*, p.129.

⁽¹⁶⁾ de Kort, Doctors, diplomats, and businessmen, pp.129-130.

表3 ジャワ産コカ葉の仕向国別輸出数量（単位トン）

仕向国別	年 度						
	1931	1933	1935	1937	1938	1939	1940
和蘭	173	74	33	56	-	69	-
英国	9	41	51	37	30	30	51
米国	-	22	23	23	11	74	33
獨逸	85	24	18	16	-	7	-
伊太利	-	-	-	-	-	-	10
日本	20	-	-	-	-	-	-
その他	-	-	-	1	-	-	2
合計	287	161	125	133	41	180	96

出典：「第3 特殊農産資源／9 コカ」「軍政下ジャワ産業綜観 第1部（農業）昭和19」（防衛省防衛研究所）
アジア歴史資料センター（JACAR）レファレンスコード（Ref.）[C14060720100] より筆者作成。

上述のように19世紀後半において、ドイツは主にペルー産のコカ葉を輸入していた。1898年にドイツの化学者が、コカ葉に含まれるすべてのアルカロイドを使用可能なコカインへと転換する方法を発見した。その結果、コカインを南米産以上にジャワ産コカ葉から抽出することが可能になったのであった。ペルー産からジャワ産コカ葉への転換の背景には、こうしたコカインの抽出方法の発見も関係した⁽¹⁷⁾。そこで、メルク社のようなドイツの製薬会社は、コカインの十分な供給と価格を制御するために、ジャワに自らのプランテーションを購入し、経営したのであった⁽¹⁸⁾。

こうしてコカインの安定供給と価格の制御を行っていたメルク社であったが、1920年代以降、ドイツは急激にコカインの製造を規制し始めることになる。というのは、19世紀にはドイツではコカインは「奇跡の薬」としてみなされていたが、20世紀に入ると「社会の脅威」とみなされるようになったからであった。フライマンによると、それはハーグ国際阿片条約の批准をドイツに義務付けたヴェルサイユ条約第295条や国際社会からの圧力というよりも、むしろ国内の薬物乱用に対する対応を迫られたドイツの政策決定者の判断によるとされる⁽¹⁹⁾。

⁽¹⁷⁾ Karch, Steven B., MD: Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, 1864-1944, in: Gootenberg (ed.), *Cocaine*, p.149.

⁽¹⁸⁾ Karch, Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, p.149.

⁽¹⁹⁾ Friman, Germany and the transformations of cocaine, pp.99-100.

(2) 第二次世界大戦期ドイツにおけるコカイン

国際連盟の国際阿片委員会に対して「麻薬の製造制限及分配取締に関する条約」の批准国は、毎年医療・学術目的のコカインの必要量を報告しなければならなかった。1942年度における見積をナチス・ドイツも報告している。それが表 4 である。そこでは、1942年度においては85キログラムのコカインが使用必要量として報告されていたのであった。それでは、国際阿片委員会に医療・学術目的に必要な量として報告されたコカイン85キログラムは、果たして第二次世界大戦中、ナチス・ドイツによって医療・学術目的のみに使用されたのであろうか。以下ではドイツにおけるコカインの用途について検討することにしよう。

表 4 ドイツにおける医療・学術目的のコカイン必要量の1942年度見積

国名	麻薬	使用必要量	総見積量
ドイツ	コカイン	85kg	85kg

出典：League of Nations: *Convention for limiting the Manufacture and Regulating the Distribution of Narcotic Drugs of July 13th, 1931. Estimated World Requirements of Dangerous Drugs in 1942, Statement issued by the Supervisory Body under Article 5*, Geneva, 1941, p.6より筆者作成。

確かにドイツでもコカインは、眼科や外科用麻酔、喘息治療を始めとした医療・学術目的で使用されていた。しかし、第二次世界大戦においてコカインは軍事目的にも使用されていた。特に小型潜水艦の出撃に際して、乗組員の精神的な負担に対処するための精神薬としても利用された。その際、他の麻薬と混ぜ合わせて使用された。それが「新発明エネルギー錠剤」=D-IX(コカイン5ミリグラム、オイコダール5ミリグラム、ペルヴィティン〔覚醒剤〕3ミリグラムの混合錠剤)である。しかもこのD-IXは、小型潜水艦の乗組員に投与する前に、ザクセンハウゼン強制収容所の囚人に投与し、人体実験も行っていたのである。具体的には、中味が詰まった背嚢を囚人に背負わせて90キロメートルまで行軍させて、麻薬の混合錠剤の効能を試すというものであった。⁽²⁰⁾第二次世界大戦において、ナチス・ドイツはコカイン・

⁽²⁰⁾ Pieper (Hg.), *Nazis on Speed*, S.131.

オイコダル・ペルヴィティンの合成麻薬を用いて強制収容所の囚人に対して人体実験を行い、その実験結果を踏まえて戦線で使用していたのであった。

その一方で、ナチス・ドイツにおいて麻薬の不正使用がいかに体系的に行われていたかが、オーラーやホルツァーによって指摘されている。特に1943年に568キログラムのコカインと60キログラムのヘロインが国防軍の中央衛生廠薬剤局から国防軍防諜部へ引き渡されたことが明らかにされている。この568キログラムのコカインの量は、国際阿片委員会に報告した1942年度コカイン必要量の約6.7倍にあたる。こうした大量のコカインは当時数百万マルクに匹敵したとされる。これらの麻薬は外貨獲得のために外国に密輸されたのではないかとオーラーやホルツァーは述べている。⁽²¹⁾

また、1944年4月には、2キログラムのコカイン、1,500グラムのモルヒネ、200グラムのヘロインが防諜部からサハラの連合国軍に対するサボタージュの活動者に引き渡されていた。その際、防諜部へのコカインの供給は明らかにコカインの受け取り側の要望に応じていたことが指摘されている。すなわち防諜部へ供給するコカインは、メルク製のコカインを示すオリジナルな包装を付けたまま引き渡すように指示されていたのであった。メルク製のコカインは世界規模で好まれた麻薬品であったという。⁽²²⁾メルク製はいわばブランドであった。

このようにナチス・ドイツは、第二次世界大戦中、医療・学術目的以外の軍事的のために合成麻薬の材料としてコカインを利用するだけでなく、外貨獲得並びにサボタージュ活動支援のための資金代わりとして使用していたのであった。それでは、ナチス・ドイツはこれらの大量のコカインを利用するにあたって、コカインの原料であるコカ葉を、第二次世界大戦中、連合国軍による海上封鎖のなか、一体どこから輸入していたのだろうか。既に表3で見たように大戦勃発によってドイツはジャワ産のコカ葉の輸入を杜絶させていた。以下で明らかにするように、大戦勃発後、ナチス・ドイツは日本からコカ葉を直接輸入していたのである。

⁽²¹⁾ Ohler, *Der totale Rausch*, S.196f.; Holzer, *Die Geburt der Drogenpolitik aus dem Geist der Rassenhygiene*, S.253-257.

⁽²²⁾ Ohler, *Der totale Rausch*, S.197.

2 第二次世界大戦期における日独コカ交易とコカ樹栽培

(1) 日独コカ交易

第二次世界大戦後、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarter of the Supreme Commander for the Allied Powers）の公衆衛生福祉局（Public Health and Welfare Section）の麻薬取締課（Narcotic Control Division）が日本のコカ交易に関する報告書を作成している。この報告書のデータが示すように、大変興味深いことに、第二次世界大戦中、日独の間でコカ葉の交易がなされていた。それを示すのが表 5 である。表 5 が示すように 1942 年には 15,000 キログラムのコカ葉が、そして 1944 年には 20,000 キログラムのコカ葉が日本からドイツへ輸出されていた。報告書の「注記」が指摘するように、1944 年の 20,000 キログラムのコカ葉は、当時既に海上輸送が極めて困難になっていたため、ドイツへの輸送はなされなかったと考えられる。その際、「注記」が記すように、これらの輸送されなかったコカ葉がドイツ滞貨として戦争末期に同盟国、すなわち日本の手に渡ったのは事実である（後述）。しかし、1942 年のコカ葉 15,000 キログラムは、ドイツへ向けて実際に輸送されたと考えられる。というのは、1942 年当時はまだ日独間の海上輸送は決して不可能ではなく、封鎖突破船によって大量の物資が実際にドイツへ輸送されていたからである。ドイツ経済使節団（Deutsche Wirtschaftsdelegation）代表で東アジアからの戦時物資の調達と輸送の統括責任者であったヴォールタート（Helmuth Wohlthat）によると、1942 年においてドイツへは貨物船 7 隻、貨物量 56,000 トンが輸送されていた。1943 年には貨物船 14 隻、貨物量 108,000 トン、タンカー 4 隻、貨物量 42,000 トンがドイツへ向けて輸送されていた。⁽²³⁾ 戦時中日本大使館に勤務していたヴィッケルト（Erwin Wickert）もまた、彼の回想録において、封鎖突破船が戦争中日本からフランスの港に入り、阿片などの麻薬を含む 84,000 トンの貨物が実際に封鎖を突破したと記述している。⁽²⁴⁾ それ故、1942 年にドイツが輸入したコカ葉はその年度においても、次年度においても十分ドイツへの輸送は可能であり、阿片と同様にコカ葉も輸送されていたと考えられる。いずれにせよ、第二次世界大戦期においてドイツ

⁽²³⁾ 熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」54頁、表 1 参照。

⁽²⁴⁾ 熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」55頁。

は少なくとも35,000キログラムのコカ葉を直接日本から買い付けて輸入していたのであった。それでは、そもそも大戦中日本はドイツに輸出できるほどのコカ葉を生産していたのだろうか。実は当時、硫黄島、沖縄本島、台湾でコカ葉が大量に生産されていたのである。

表5 日本のコカ葉輸出 (単位kg)

	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946
輸出国										
ドイツ	Nil	Nil	Nil	Nil	Nil	15,000	Nil	20,000*	Nil	Nil

*注記 (Remarks): 「実際には、コカ葉はドイツへは輸出されず、戦争末期に同盟国の手に渡った」。

出典: TABLE B. EXPORTS OF COCA LEAVES, in: GHQ/SCAP, Records, Public Health and Welfare Section, Japan — Special Reports on Coca Leaf Production, Raw Opium Drug Addiction & Drug Addicts, Feb. 1947 — Apr. 1948, PHW-01825 (マイクロフィッシュ請求番号): 国立国会図書館憲政資料室蔵より筆者作成。

表6 各生産地別のコカ葉生産量 (単位kg)

	硫黄島	沖縄本島	台湾
年			
1937	52,559	14,000	119,813
1938	53,383	22,598	82,298
1939	52,550	23,555	70,101
1940	52,850	22,050	44,650
1941	82,300	24,200	87,274
1942	85,275	32,440	71,038
1943	39,025	32,440	49,391
1944	26,062	28,350	78,293
1945	Nil	Nil	Nil
1946	Nil	Nil	Nil

出典: Quantity of Coca Leaves Harvested from Plants under Cultivation, in: GHQ/SCAP, PHW-01825: 国立国会図書館憲政資料室蔵より筆者作成。

表6から明らかなように、1937年から1944年までの間、硫黄島、沖縄本島、台湾といった三つの主要なコカ葉の生産地の中で、台湾産のコカ葉が圧倒的な生産量を誇っていた。しかし、1940年と1942年においては硫黄島産のコカ葉の生産量が最大量を記録していた。しかも1944年以外は、硫黄島の生産量は沖縄本島よりも上回っていた。従来、戦時中において硫黄島でコカ葉が生産され、一時期は日本国内で最大の生産量を誇っていた事実は殆ど知られてこなかったといえる。これらのコカ葉を使用して、日本国内においてコカインを製造していたのは、星製薬株式会社、株式会社武田長兵衛商店、三共株式会社、江東製薬株式会社、株式会社鹽野義商店の五社であった。そのうち1937年以降の武田、鹽野義、三共の各製薬会社のコカイン生産量を示したのが表7である。これらの三社の中で三共が最大量のコカインを生産していた。また上記五つのコカイン製造の会社の中では星と武田が台湾と沖縄本島でコカ樹を栽培していたのであった。以下では、台湾と沖縄本島、さらには硫黄島におけるコカ樹栽培について検討してみよう。

表7 粗製コカインの各製薬会社別生産量（単位kg）

	武田	鹽野義	三共	総計
1937	95	56	120	271
1938	35	50	120	205
1939	42	50	120	212
1940	40	74	120	234
1941	40	53	280	373
1942	80	53	120	253
1943	80	54	120	254
1944	Nil	54	120	174
1945	Nil	Nil	Nil	Nil
1946	Nil	Nil	Nil	Nil

出典：Table 2, in: GHQ/SCAP, PHW-01825：国立国会図書館憲政資料室蔵より筆者作成。

（2）日本におけるコカ樹栽培—硫黄島を中心に—

日本国内のコカインの製造については、上述のように、星、武田、三共、江東、鹽野義の五社が製造権を有していた。コカ樹の栽培については、台湾においては星薬草園と台湾生薬が合計300町歩、沖縄本島においては武田長兵衛商店が40町歩、硫

黄島においては硫黄島産業株式会社が40町歩の栽培権を有していた。⁽²⁵⁾

台湾においてコカ葉の生産が始まったのは、1916年からである。最初のコカ樹栽培は、台湾の製糖会社によってなされた。この製糖会社はジャワにサトウキビのプランテーションを所有していたが、それを台湾で精製していた。台湾の製糖産業が衰退するとその代替策としてコカ樹が栽培されるようになった。台湾総督府もコカ樹の栽培を奨励した。その製糖会社が名前を変えて、台湾生薬とな⁽²⁶⁾った。台湾産のコカ葉は南米産よりも多くのアルカロイドを含有していたとされる。こうして台湾⁽²⁷⁾においてコカ樹が栽培されるようになった。

沖縄本島におけるコカ樹栽培は、武田薬草園においてなされた。1927年3月に台湾に嘉義薬草園を開設し、そこでコカ樹園を拡大経営する予定であった。しかし、かねてからコカ葉の自給自足の必要性を感じていた武田商店は、台湾と比較的気象の共通している沖縄県下に適地を求め、1929年3月に国頭郡羽地村字我部祖河に武田薬草園を開設した。さらに嘉義薬草園からコカ樹の種子を移入して直播を行い、同年9月にコカ栽培を出願するに至⁽²⁸⁾った。

当初は枯損率が高かったが、総合的改良の結果、コカ樹の植生は漸次良好となり、枯損率は著しく減少したという。植付面積を年々拡張し、1938年には植付も大体終了し、採葉量も増加の一途をたどった。当時のコカ樹園の面積は40町6反7畝16歩、植付面積は14町2反7畝⁽²⁹⁾（約14ヘクタール）であった。

次に硫黄島におけるコカ樹栽培の実態について詳細に述べることにしよう。硫黄島のコカ樹栽培については、小笠原島においてコカ樹栽培の調査研究を行った豊島⁽³⁰⁾恕清の調査報告書「麻酔薬コカイン原料植物コカ樹に就て」（昭和17年3月稿）が残されている。以下では、本調査報告書に依拠しながら、硫黄島におけるコカ樹栽培について紹介することにしよう。

豊島によると、小笠原産（硫黄島産を含む）のコカ葉のアルカロイド含有率は、

⁽²⁵⁾ 林産部研究補助員嘱託豊島恕清「麻酔薬コカイン原料植物コカ樹に就て」東京帝国大学南方科学研究会資源部『南方資源研究資料第二号』成美堂書店、1943年、42頁。

⁽²⁶⁾ Karch, Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, p.151.

⁽²⁷⁾ Karch, Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, p.155.

⁽²⁸⁾ 武田薬品工業株式会社社内史編纂委員会編『武田百八十年史』武田薬品工業株式会社社内史編纂委員会、1962年、353-354頁。

⁽²⁹⁾ 武田薬品工業株式会社社内史編纂委員会編、前掲『武田百八十年史』354-355頁。

⁽³⁰⁾ 豊島、前掲「麻酔薬コカイン原料植物コカ樹に就て」42頁。

良質とされたジャワ産よりも上回っていた。両者を比較したのが、表 8 である。

表 8 ジャワ並びに小笠原島産ココ樹葉アルカロイド含有量比較

産 地	頂葉より第 8 葉に至る総量				
	生葉量	乾燥葉量	アルカロイド 含有率	アルカロイド 含有実量	乾葉歩止
ジャワ産	386.6mg	122.5mg	1.60%	1.96mg	3.16%
小笠原島産	521.0	168.5	1.92	3.24	3.22
差 引					
小笠原島産増量	134.4	46.0	0.32	1.28	0.06

出典：林産部研究補助員嘱託豊島恕清「麻醉薬コカイン原料植物ココ樹に就て」東京帝国大学南方科学研究会資源部『南方資源研究資料第二号』成美堂書店、1943年、51 頁の表より転載。なお、一部字体と表記を改めた。

豊島によると、ココ樹の各葉については概して小笠原産(硫黄島産を含む)がジャワ産よりも優位を示し、その平均を比較しても、すべての点において小笠原産が優れていると評価されている。特にアルカロイドの含有率はジャワ産の1.60%に対して、小笠原産は1.92%であり、「0.33%^{ママ}の優位を示し、遙かに優つて居る」と評価されている。⁽³¹⁾ また硫黄島においては、1924年より事業的にココ樹栽培が開始され、その栽培面積は100ヘクタールに達して、主要なる産業をなしているという。その硫黄島でのココ樹栽培と小笠原諸島における父島のそれとを豊島は比較検討している。父島でのココ樹栽培は、5年木に至って採葉量の極に達し、それ以降同じ量の生産を持続でき、その最盛期には平均1ヘクタール当たり3,375キログラムの乾葉を生産するという。一方、硫黄島においては4年木に至って採葉の極に達し、平均1ヘクタール当たり4,050キログラムの乾葉を生産し、父島に優っている⁽³²⁾と評価している。以上の検証を踏まえて豊島は次のような結論に達している。

「要するに小笠原島に於けるココ樹栽培は頗る有利であつて、他の栽培地に比し遜色なく、殊に硫黄島に於けるものゝ如き生育旺盛、採葉量并にアルカロイドの含有量共に、ココ葉主要生産地たるジャヴァ及びスマトラに比しても優つて居る」。⁽³³⁾

(31) 豊島、前掲「麻醉薬コカイン原料植物ココ樹に就て」51頁。

(32) 豊島、前掲「麻醉薬コカイン原料植物ココ樹に就て」51-53頁。

(33) 豊島、前掲「麻醉薬コカイン原料植物ココ樹に就て」53頁。

このように豊島によると、硫黄島のコカ葉はジャワやスマトラと比較しても優っていたのであった。それでは、豊島が高く評価する硫黄島のコカ葉はどのような生産関係の下、栽培されていたのであろうか。

硫黄島は長い間無人島であったが、19世紀末に入植がなされ、入植当初から20世紀初頭までは硫黄採掘と漁業、野菜類の栽培による自給自足的な経済が続いていた。その後、綿花栽培が主流となり、1910年代には甘蔗の栽培と白下糖の製造に特化したモノカルチャー経済が形成された。しかし、1920年代後半には糖価の下落⁽³⁴⁾によって糖業モノカルチャー経済の維持が困難となり、糖業の他に、コカ樹栽培、コカインの製造、レモングラスやデリスの栽培と精製など、農産物の多角化がなされた。そのなかでコカの移出額が1930年代に入ると砂糖の移出額を上回った。

硫黄諸島の農民のほとんどは小作人であり、しかもその多くが久保田拓殖合資会社（1913年設立）、この会社を買収した硫黄島拓殖製糖会社（1920年設立）、その後進である硫黄島産業株式会社（1936年社名変更）の小作人ないしはその経営者の小作人であった。小作人の過半数は会社の従業員との兼業で、農業の合間に会社のコカイン製造工場などの工場労働に従事し、港湾荷役の負担も負わされていた⁽³⁵⁾。硫黄島の小作人は、一部自給自足用を除いて自由な作付けを許されておらず、会社が指定したコカなどの商品作物の栽培を要求された。収穫物も世帯の食料以外は会社に納入が求められ、市場価格低迷時にはコカなどの収穫物の一部廃棄も要求されていた⁽³⁶⁾。こうした状況に耐えかねて、硫黄島において小作争議が生じたのであった。以下はその模様を報じた当時の新聞記事である。

「東京から遙か七百海里の沖小笠原群島中の硫黄島に小作争議が持ち上りかけ二人の悲壮な陳情隊（？）が二月に一度の便船を利用して数日前上京、十一日東京府の小作官に窮状を訴へることとなつた、二人は硫黄島拓殖製糖會社（社長堤徳二氏）の小作人伊藤仁之松（三一）瀧澤秀吉（三二）の両氏である

× ×

そのいふ所によると島には六十人の老小作人が四百人近くの家族と共に甘蔗、コ

⁽³⁴⁾ 石原、前掲「そこに社会があった」30頁。

⁽³⁵⁾ 石原、前掲「そこに社会があった」30頁。

⁽³⁶⁾ 石原、前掲「そこに社会があった」30-31頁。

カ（鹽酸コカインの原料）等の小作栽培に當つてゐるが生産品の賣捌きは前記の拓殖製糖會社（大正八年設立）に一任してゐたから、自分達の手で作つたものが一體いくらで取引されたかも知らず、食糧品、日用品等は會社から支給されその代金を賣上金から差引かれるため、現金が手に入るのは賣上金の一部が残つてゐる時だけそれも便船が東京の本社から現金を運んでくる時に限るので年に六度しか錢の顔を見ることが出来なかつた

昭和四年同會社が小作人に對する報酬制度を改めてからは、砂糖の値下り、濫培による地味の不良化も手傳つて借金は増加する一方、小作人一家當り五、六千圓から最高三萬圓位の借金はざらといふ現状となつた病気になつても醫者にもかゝれず死者、生活難による發狂者が續々出て來た

× ×

小作人達の不満は段々昂まつて、昨年八月には小作人組合が結成され、九月末には遂におづおづの小作人の示威運動となり棄氣味の怠業も始まつた、これでやつと今春から幾分か不合理が改められ現金支拂ひとなつた、しかし依然會社の『搾取』はやまないのやつと目がさめた小作人達が代表を選びだし證據の帳面を携へさせて窮狀陳情のため海路はるばる上京させたといふのだ

九日夕京橋區月島通十ノ九後藤方で伊東、瀧澤兩氏は交々語る

兎に角借金のないのは最近加つたほんの二、三人に過ぎない現状でこれでは益々苦しくなる許りです、私達の希望は小作料は現金で納め借りた土地で自由耕作をなしたいこと、會社への借金は年賦ででも返せる程度に整理したいこと、會社に委託したものの賣上も現金でもらふことにしたいことで弁護士に相談して交渉を進めたい」⁽³⁷⁾

硫黄島におけるコカ樹栽培をめぐる生産関係が、農奴をも想起させる小作人らに対する苛酷な「搾取」に基づいていた実態が以上からも窺えよう。硫黄島における小作争議は、東京府の小作官補の調停によって1934年5月にようやく解決した。当時の報道によると、硫黄島拓殖製糖株式会社側が大幅に譲歩し、親方制度を廃止し、

⁽³⁷⁾ 「孤島の砂糖畑から小作争議の訴へー飢と苦熱に泣く四百の同胞 硫黄島の代表上京」『東京朝日新聞』昭和8年11月10日朝刊、11面（本論では朝日新聞社聞蔵Ⅱビジュアルを使用。以下同じ）。なお、引用に際しては、ルビを省略した。

賃貸借にし、小作料も歩合制度、物品支払いもやめて、現金支払いにし、砂糖も自由耕作にすることで、硫黄島における生産関係は「原始形態」から「内地並」になった。こうして小作争議が3年の歳月を経て一応解決された。これを当時の新聞は「硫黄島農奴解放」⁽³⁸⁾と称した。

しかし、第二次世界大戦において硫黄島産業株式会社と島民との間でさなる問題が生じた。島民の22名が1944年7月初旬、村長や村役場の兵事係から軍の命令で「徴用」の対象になったと告げられて島に残留した。しかし、軍からの徴用令書の交付や業務指示は一切なく、硫黄島産業株式会社の現地責任者の常務取締役の監督の下、コカ刈り、コカイン製造、荷造り、運搬など会社のための業務をさせられた。この常務はコカインを移出する段取りを終えると、島民22名中の数名に対してのみ「内地」渡航の便宜を図ったが、他の残りの島民には渡航の手配はしないまま1944年7月末に軍用機に便乗して「内地」に待避したという。その結果、16名が「内地」に待避することもできず、そのまま硫黄島に取り残された。⁽³⁹⁾そして彼らは硫黄島の死闘に巻き込まれたのであった。

第二次世界大戦中、硫黄島産のコカ葉は、国内で最大の生産量を二度ほど記録していたが、硫黄島のコカ樹栽培には上記のような事実が存在していたのであった。

(3) 日本軍政下のオランダ領東インドにおけるコカ樹栽培と交易

そもそも1920年代において、ジャワ産のコカ葉は日本への輸出に次第に依存するようになっていた。⁽⁴⁰⁾しかし、1920年代後半以降コカ葉の輸出状況は一変することになる。日本のコカ政策が転換され、オランダ領東インド・南米産コカ葉の輸入から、台湾、沖縄、硫黄島産コカ葉の利用へと転換されたのである。1929年までに日本と植民地のプランテーションは、日本の麻薬製造企業にコカ葉を十分に供給できるようになったのがその背景であった。こうして1929年に日本政府は日本人所有のプランテーション以外のジャワからのコカ葉の輸入許可を取り消した。⁽⁴¹⁾その結果、1930

⁽³⁸⁾ 「噴火島上の争議 三年振に解決—硫黄島農奴解放へ」『東京朝日新聞』昭和9年6月26日朝刊、13面。

⁽³⁹⁾ 石原、前掲「そこに社会があった」33頁。

⁽⁴⁰⁾ Karch, Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, pp.149-150.

⁽⁴¹⁾ Karch, Japan and the cocaine industry of Southeast Asia, p.150.

年代以降ジャワから日本へのコカ葉の輸入は、ほぼ杜絶したのであった(表3参照)。それでは、第二次世界大戦勃発以降、とりわけ日本軍によるオランダ領東インド占領以降、軍政下ジャワにおけるコカ樹栽培とコカ葉の交易はどうなったのだろうか。

日本軍によるオランダ領東インド占領前におけるジャワのコカ樹の栽培面積とコカ葉の生産高を示したのが、表9である。農園数、栽培面積が減少していたにも拘わらず、コカ葉の生産高が減少していなかった点は興味深い。日米英蘭戦が勃発する前年の1940年においては、コカ樹の面積は383ヘクタールであり、コカ葉の生産高141トンであった。その生産高のうち、米英二国にコカ葉の84トンが輸出されていた(表3参照)。日米英蘭戦が勃発する前年までジャワ産コカ葉の約5分の3が米英に輸出されていたことがわかる。

表9 ジャワにおけるコカ葉生産高(単位 面積ヘクタール、生産高吨)

	農園数	栽培面積	生産高
1930年	49	522	162
1931年	48	526	78
1932年	47	531	79
1933年	56	895	160
1934年	55	840	104
1935年	56	1,059	124
1936年	54	941	143
1937年	50	752	109
1938年	50	731	98
平 均	53	755	117
1939年	48	754	143
1940年	48	383	141
1941年	34	386	135
平 均	44	508	139

出典：「第3 特殊農産資源／9 コカ」JACAR Ref. [C14060720100]
より筆者作成。

日米英蘭戦が勃発した1941年のジャワにおけるコカ葉の生産高は135トンであった(表9参照)。これに対して、日本軍のジャワ占領以降、日本の軍政によってコカ増産五ヶ年計画なるものが立案されていた。それを示す史料が次の「コカ増産計画」である。

「(3) コカ増産計画

コカの増産に關しては左の如く五ヶ年計畫を樹立し最終年度に於ける生産目標を九五〇匁とせり。之が爲茶企業園の轉換に依り一八八〇陌の増殖地を造成することとせり。

昭和十九 年	一六〇匁
昭和二十 年	一六〇匁
昭和二十一年	一六〇匁
昭和二十二年	二五〇匁
昭和二十三年	五〇〇匁
昭和二十四年	九五〇匁

(4) 法令通牒

昭和十八年九月十二日 治政産農第七二三號 コカ葉價格決定ニ關スル件⁽⁴²⁾

このように日本は、第二次世界大戦中、ジャワにおいてコカの増産のための五ヶ年計画を立てて、生産目標をコカ葉950トンに定め、茶企業園を転換し、コカ樹栽培地を1,880陌(ヘクタール)まで拡大する予定であった。生産目標のコカ葉生産高は1941年と比べると、135トンから950トンへの大幅な増産を、コカ樹栽培面積は、1941年と比較すると、386ヘクタールから1,880ヘクタールへの大幅な拡大を意味した。日本は戦時中「大東亜共栄圏」内において阿片増産、罂粟栽培地拡大だけでなく、⁽⁴³⁾コカ増産、コカ樹栽培地拡大をも計画していたのであった。

それでは、第二次世界大戦期においてジャワのコカ葉は一体どこに輸送されていたのだろうか。その一部は、南方軍から陸軍衛生材料本廠に輸送されていた模様である。それを示すのが次の史料である。

「陸亜密電

副官ヨリ南方軍總參謀長及第十六軍
參謀長へ電報案

⁽⁴²⁾ 「第3 特殊農産資源／9 コカ」 「軍政下ジャワ産業綜観 第1部(農業)昭和19」(防衛省防衛研究所) アジア歴史資料センター(JACAR) レファレンスコード(Ref.) [C14060720100]。

⁽⁴³⁾ 中央档案馆・中国第二歴史档案馆・吉林省社会科学院合編『東北經濟掠奪』北京：中華書局、1991年、818頁；中央档案馆整理『日本侵華戰犯筆供』伍卷、北京：中国档案出版社、2005年、587-588頁。

十月分一貫輸送物質トシテ「コカ葉^マ・五〇トン、「カカオ」二〇〇トンヲ第二十
四野戦貨物廠ヨリ陸軍衛生材料本廠大阪出張所ニ還送相成度依命

通電先 南方軍、第十六軍

一二三四昭和拾七年拾月拾日⁽⁴⁴⁾

1942年10月においては、コカ葉50トンが南方から大阪に向けて輸送されていた模様であった。また1943年度のコカ葉の取扱計画の示達と実績を示す南方軍政関係の極秘史料が残されている。それが、表10である。1943年度の第一四半期、第二四半期、第三四半期におけるコカ葉の一貫輸送示達の累計は50トンであったが、実績の累計は103トンであり、示達された累計よりも53トンも多くコカ葉が輸送されていたのであった。ジャワ産のコカ葉に関しては、主に日本陸軍内部でコカ葉の交易が計画以上になされていたことがわかる。そこでは、南方軍とドイツとの交易は史料上確認できない。第二次世界大戦中の「大東亜共栄圏」内におけるコカ葉交易の実態を示す史料として興味深いといえる。

表10 1943年度におけるコカ葉の一貫輸送示達と実績の比較表（単位トン）

品目	取扱計画	示達				実績				過不足
		第一四半期	第二四半期	第三四半期	累計	第一四半期	第二四半期	第三四半期	累計	
コカ葉	-	-	五〇	-	五〇	-	九五	八	一〇三	五三

出典：「15. 昭和18年度第1・第3、4半期南方物資一貫輸送示達と実績比較表」「南方軍政関係資料その2昭和19年度」（防衛省防衛研究所）JACAR Ref. [C14060767200] より筆者作成。

以上が日本軍政下のジャワのコカ樹栽培とコカ交易の実態である。既に述べたように、日独間で直接コカの交易がなされていたが、そこで取引されたコカ葉はジャワ産ではなく、台湾、沖縄、硫黄島産の一部であったと史料上考えられる。ナチス・ドイツが日本から直接購入したコカ葉は、大戦末期においてドイツ滞貨として逆に日本に売却されることになる。以下ではその模様について詳細に検討することにしよう。

⁽⁴⁴⁾ 「コカ葉及カカオ還送に関する件」昭和17年「陸亜密大日記第46号2/2」（防衛省防衛研究所）JACAR Ref. [C01000716500]。

3 第二次世界大戦末期における日独コカ交易

(1) ドイツ滞貨としてのコカ葉

第二次世界大戦期におけるナチス・ドイツと東アジアとの交易に関してドイツ側の責任者は既に述べたように、ドイツ経済使節団代表のヴォールタートであった。実際の交易を担ったのは、ローゲス商会 (Roges [The Reich Office for German Economic Sales] Handelsgesellschaft m.b.H., Berlin) であった。このローゲス商会とは、ドイツ政府が所有する会社であり、ドイツ経済使節団によって日本で設立された。その目的は、使節団によって選出された特定のドイツ企業を通じて戦時物資を購入することであった。ローゲス商会が取り扱った物資は、油脂、コカ葉、錫、生ゴム、絹、キニーネ、魚油、阿片などであった。ドイツ経済使節団の任務の一つは、東アジアにおける特定のドイツ企業を通じて重要な戦時物資の購買を組織かつ統制することであった。ドイツ政府はローゲス商会の日本代理店として、ハーマツヒャー商会 (H. W. Hamacher & Co., Berlin) を選出した。ハーマツヒャー商会は、日本に居住していたウムバウ (Hans Umbhau) をその代表として指名した。1941年6月の独ソ戦勃発以降、ウムバウはローゲス商会とハーマツヒャー商会の代理人として、ドイツの運送業者並びに荷揚げ業者として行動することになった⁽⁴⁵⁾。

日本政府は、ローゲス商会が関心を抱く商品の売買において、その代理として武田商店と交易営団を指名した。ドイツ降伏後にはドイツ滞貨の売買においては、ヴォールタートと外務省戦時経済局長主導の下、ローゲス商会と交易営団との間で直接契約がなされることになる⁽⁴⁶⁾。ドイツが日本から購入したコカ葉も交易営団が取り扱うことになった。

ドイツ滞貨はそもそもローゲス商会が戦時中に、東アジア各地で買い付けた物資で戦況悪化のため、ドイツ本国へ輸送できずに、横浜、神戸、大連等の保税倉庫に保管されていたものである。1944年1月頃、日独両国政府の話し合いによって、このドイツ滞貨を日本の緊急需要に役立させることになった。そのためドイツ側は、業務をローゲス商会の駐日代表ヴォイト⁽⁴⁷⁾ (Helmuth Woidt) に委ね、日本側は交易営

⁽⁴⁵⁾ 以上の叙述は、熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」57頁による。

⁽⁴⁶⁾ 熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」57-61頁参照。

団を指定買上機関とした。これを受けてヴォイトはその実務をウムバウに代行させた。ドイツ滞貨の最初の買上契約は、1944年3月15日に行われた。その後も買上契約がなされ、1945年5月3日までに計8回にわたりドイツ滞貨の買上が行われた⁽⁴⁸⁾。

交易営団は、交易業務の統制と重要物資の保管を目的として、1943年3月の交易営団法、4月の交易営団法施行令の公布を受けて、6月に設立された。海上輸送が停滞すると、日本国内の輸出用物資の滞貨が大きな問題となった。その際ドイツ滞貨も問題となったが、これは税関等に滞貨しているドイツ向けの物資を指し、これには二種類あった。一つは対ドイツ輸出用物資で、日本側が保有する滞貨である。もう一つは、ドイツが東アジア各地で買い付けた物資で、ドイツへ輸送できずに保管されていたドイツ側保有の滞貨である。交易営団は、ドイツ向けの日本側保有の滞貨と並んで、ドイツ側保有の滞貨をも取り扱った。以下で取り扱うコカ葉は、日本から購入し、ドイツへ輸送できずに保管されていたドイツ側保有の滞貨である⁽⁴⁹⁾。以下では、ドイツ滞貨としてのコカ葉をめぐるローゲス商会と交易営団の売買契約について検討していこう。

(2) ローゲス商会と交易営団の売買契約

ナチス・ドイツが無条件降伏する直前の1945年5月3日にローゲス商会と交易営団との間で、コカ葉を含む10品目のドイツ滞貨の売買契約がなされている。それは、総計17,609,920.22円で、そのうちコカ葉は369箱、総重量28,502キログラム、契約価格320,068.92円で契約がなされていた⁽⁵⁰⁾。そのローゲス商会と交易営団との売買契約の草案が残されている。それが以下の史料である。

「複写

草案

(47) ヴォイトの名前はここでは通例に従ったが、GHQ/SCAP文書では„Alfred Helmut (sic!) Woitdt“と記述されている史料が幾つか存在する。例えば、CKT/AO'C/sa, 20 January 1950, in: GHQ/SCAP, Records, office of Civil Property Custodian, Woitdt, Alfred Helmut — Worm, Johanna, Jan. 1942 — May 1952, CPC-33665 (マイクロフィッシュ請求番号)：国立国会図書館憲政資料室蔵を参照。

(48) 以上の叙述は、熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」57-58頁による。

(49) 以上の叙述は、熊野、前掲「ナチ阿片・交易営団・GHQ」58頁による。

(50) MLT/AC/ys, 21 November 1951, in: GHQ/SCAP, Records, office of Civil Property Custodian, Roges (G.m.b.H.) (Hans Umbhau), May 1945 — Jan. 1946, CPC-40734; Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, Records, office of Civil Property Custodian, Roges (G.m.b.H.) (Hans Umbhau), May 1945 — Jan. 1946, CPC-40736：国立国会図書館憲政資料室蔵。

交易営団（東京）及び有限会社ローゲス商会（ベルリン）間の売買契約Ⅷ

- 1) 交易営団（東京）（買い手）は、有限会社ローゲス商会（ベルリン）（売り手）から添付されているリストAとBによる商品を総計17,609,920.22円で購入する。
- 2) 売却価格は現状の商品の品質に基づき、1945年4月30日までの保管料やハーマツヒャーがそれまで支払った費用やその他の費用は、売却価格に含まれるものとする。その後は、これらの費用は買い手によって負担されるものとする。
- 3) 買い手は本契約締結に基づき、全売却価格17,609,920.22円をローゲス商会（ベルリン）に送金するために、両政府間の振替協定に従って横浜正金銀行に支払うか、あるいは売り手の要求に従ってドイツ東亜銀行（Deutsche Bank fuer Ostasien）（東京）のH. H. ヴォイト博士の口座『ローゲス特別勘定』に支払うものとする。
- 4) 売り手は買い手に本契約に基づいて荷渡し指図書を渡すものとする。荷渡し指図書の受領でもって、本件の売却は完了し、買い手はあらゆるリスクを引受けるものとする。
- 5) 買い手はリストAとBに記された総重量の商品を受け取るものとする。ドラム缶や箱が損傷をこうむり、中身がすべてないしは一部、喪失した場合は、それに相応した割引がなされるものとする。しかしながら、そのような損害の共同の調査は、荷渡し指図書が渡されて4週間以内になされねばならない。そうでない場合、リストAとBに記された総重量が最終的なものとみなす。
- 6) 本契約は、日本語と英語で作成され、日本語版と英語版とも拘束力を有する。

交易営団総裁

石田禮助

有限会社ローゲス商会（ベルリン）

H. H. ヴォイト博士⁽⁵¹⁾

ここでは、交易営団総裁で後の国鉄総裁の石田禮助とローゲス商会のヴォイトとの間で契約が結ばれていたのがあった。支払い手段として、横浜正金銀行ないしはドイツ東亜銀行におけるヴォイト名義の「ローゲス特別勘定」への支払いが売買契約において指定されていた点は興味深い。

⁽⁵¹⁾ Annex No.1: Abschrift. Entwurf. Purchase Contract VIII between Koeki Eidan, TOKYO, Roges Handelsgesellschaft m.b.H., Berlin, in: GHQ/SCAP, CPC-40736: 国立国会図書館憲政資料室蔵。

こうした売買契約を受けて、ドイツ無条件降伏後の1945年5月22日に交易営団は、ローゲス商会の代理であるハンス・ウムバウ事務所を通じて、三菱倉庫に保管してあったコカ葉369箱、総重量28,502キログラムの荷渡し指図書を受領したのであった。⁽⁵²⁾

1945年8月1日に横浜税関の管轄地にあった三菱保税倉庫に保管されていたコカ葉の調査がなされたが、コカ葉の大部分が既に陸軍衛生材料本廠横浜出張所によって強制的に運び去られたことが判明した。コカ葉369箱、総重量28,502キログラム中、315箱、19,898キログラムが陸軍衛生材料本廠によって運び出されていたのであった。三菱保税倉庫に残されていたコカ葉は、54箱、8,604キログラムであった。交易営団がドイツから購入したコカ葉は、当時まだ輸入手続きが完了しておらず、保税倉庫留置扱いの商品であった。⁽⁵³⁾ それにも拘わらず、陸軍衛生材料本廠は、交易営団の承諾なしに勝手にコカ葉を運び出していたのであった。そうしたなか、日本は1945年8月15日を迎えたのであった。

(3) 戦後におけるコカ葉のゆくえ

第二次世界大戦末期に交易営団がローゲス商会から購入したコカ葉は、戦後どうなったのだろうか。とりわけ陸軍衛生材料本廠が勝手に運び出したコカ葉315箱、19,898キログラムはその後どうなったのだろうか。以下ではこのコカ葉のゆくえを追うことにしよう。

戦後直後、交易営団は陸軍衛生材料本廠に対して、コカ葉315箱分の支払いを要求した。これに対して、1945年12月12日に陸軍衛生材料本廠は、50箱分、3,400キログラムのコカ葉の代金49,028円を支払っただけであった。残りの265箱分は、交易営団への支払いがないまま、政府供給として陸軍衛生材料本廠によって江東製菓に譲渡されたのであった。そこで交易営団側は、江東製菓に残り265箱分のコカ葉の支払いを要求するに至った。要求額は、ローゲス商会からの購買価格に諸経費を加えたも

⁽⁵²⁾ Annex No.2: HANS UMBHAU VERTRETER FUER HARRY W. HAMACHER SPEDITEUR, in: GHQ/SCAP, CPC-40736; Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, CPC-40736 : 国立国会図書館憲政資料室蔵。

⁽⁵³⁾ Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, CPC-40736 : 国立国会図書館憲政資料室蔵。なお、本調査報告書では、“315 cases (19,900kgs)”及び“54 cases (8,602kgs)”と誤記されている。本調査報告書には、他にも数字の誤記が散見される。

のであった。これに対して江東製菓側は、要求額を支払うと損失を被るになることを理由に支払いを拒否した。そこで交易営団は、厚生省から特例の売却価格の許可を得て、1946年6月10日に江東製菓に対して新たに237,930円の支払いを要求した。⁽⁵⁴⁾

その結果、交易営団は江東製菓から請求額の約束手形を受け取った。しかし、この約束手形は不渡りになった。その後、江東製菓は交易営団による再三にわたる支払い要求にも拘わらず、請求額を支払わなかった模様である。⁽⁵⁵⁾

それでは、横浜の三菱保税倉庫に保管されていた54箱のコカ葉、総量8,604キログラムはどうなったのだろうか。これらのコカ葉は、日本が降伏するまで三菱保税倉庫に保管されていた。しかし、1945年8月27日に連合国軍が横浜税関を占領して以降、日本側の立ち入りが禁止された。その結果、交易営団によるコカ葉の調査や持ち出しは、日本側の立ち入り禁止が解除されるまで不可能となった。⁽⁵⁶⁾

その後、日本側の立ち入り禁止が解除されたため、1946年4月15日、交易営団はコカ葉54箱、総重量8,604キログラム(46,642.92円相当)の調査を徹底的に行った。しかし、そこに保管したはずのコカ葉54箱は戦後の混乱のなか、吉草根2,000キログラム(2,473.08円相当)とともに行方不明になっていたのであった。これについて以下の交易営団の内部報告書が残されている。

「横浜の三菱保税倉庫に保管されていた標題のドイツ滞貨のゆくえは、戦争終結時には一般的だった混沌とした状況のためにわからなくなっている。ドイツ滞貨の徹底した調査を可能な限り行ったにも拘わらず、それらのゆくえは結局確認できなかった。

ドイツ滞貨の取り扱いについて総務部メンバーと協議した結果、本件を会社の損失として処理する以外に他に選択肢はないとの結論に達した。この点について寛大なご理解を頂ければ幸いである。

項 目

1. コカ葉：54 c / s 8,604キログラム（総計）

⁽⁵⁴⁾ Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, CPC-40736; Annex No.3: ISHIDA Reisuke to ASHIDA Hitoshi, 1 November 1945, in: GHQ/SCAP, CPC-40736; Particulars, in: GHQ/SCAP, CPC-40736; Annex No.4: Claim Note, 10 June 1946, in: GHQ/SCAP, CPC-40736：国立国会図書館憲政資料室蔵。

⁽⁵⁵⁾ Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, CPC-40736：国立国会図書館憲政資料室蔵。

⁽⁵⁶⁾ Investigation on Coca Leaves, in: GHQ/SCAP, CPC-40736：国立国会図書館憲政資料室蔵。

購買価格（未払い）46,642.92円

2. 吉草根：10 e / s 2,000キログラム（総計）

購買価格（未払い）2,473.08⁽⁵⁷⁾円」

こうして保税倉庫に保管されていたコカ葉54箱は、戦後の混乱のなかゆくえがわからなくなった。結局、交易営団はこのコカ葉を会社の損失として計上したのであった。

おわりに

以上が、コカを素材としてみた第二次世界大戦期を中心とした日独関係史である。コカも阿片と並んで一連の国際阿片条約によって、国際的な禁制品となっていた。そのコカの交易が第二次世界大戦中、日独間で直接なされていたのであった。そこでは、日本からドイツへ直接コカ葉が売却され、輸出されていたのである。これらのコカ葉の一部は、阿片と同様に封鎖突破船によってドイツへ輸送されたと考えられる。しかも大戦末期においては、逆に、日本がドイツ滞貨であるコカ葉の売買契約を直接ドイツと行い、コカ葉28,502キログラムを受領していたのであった。こうした第二次世界大戦における日独コカ交易の史実はこれまで全く知られていない。日独コカ交易において、ローゲス商会と交易営団が重要な役割を演じており、事実両者はコカ葉の売買契約の当事者であった。しかし、ローゲス商会から交易営団が購入したコカ葉の一部は、陸軍衛生材料本廠を通じて江東製薬に渡った。他の一部は、戦後の混乱のなか横浜の三菱保税倉庫から喪失してしまったのであった。このコカ葉のゆくえは不明である。

そもそもドイツは、19世紀においてはコカ葉をペルーやボリビアから輸入していた。20世紀に入るとドイツ製コカインの原料はジャワ産コカ葉が主流となり始め、第一次世界大戦を契機にペルー産からジャワ産へと転換した。1930年代前半までドイツは主にジャワ産のコカ葉を輸入していたが、第二次世界大戦が勃発するとジャワからの輸入は途絶え、日本から直接コカ葉を輸入することになったのである。ナ

⁽⁵⁷⁾ Annex No.5: From Chief, Medicines Section to Chief, Accounts Section, 15 April 1946, in: GHQ/SCAP, CPC-40736：国立国会図書館憲政資料室蔵。

チス・ドイツは、大戦中、コカインを医療・学術目的だけでなく、軍事目的のために合成麻薬の材料として利用していた。しかも、外貨獲得並びに連合国軍に対するサポーター活動支援のためにコカインを利用していたのであった。

第二次世界大戦期の日本におけるコカ葉の生産地は、台湾、沖縄本島、硫黄島であった。1940年と1942年において、硫黄島のコカ葉の生産量は上記三つの生産地の中で最大であった。硫黄島のコカ葉は、ジャワやスマトラのコカ葉に比べても優っていると評価されていた。硫黄島でのコカの生産関係は小作関係を基礎としており、小作人が「農奴」と称されるほどの苛酷な状況下でコカ葉やコカインが生産されていた時期もあった。

その一方で、第二次世界大戦中、日本軍政下にあったジャワにおいてコカ増産五ヶ年計画が立案され、コカ増産、コカ樹栽培地拡張が計画されていた。さらにジャワのコカ葉は、計画以上の実績を伴って主に日本陸軍内部で交易されていたのであった。

近年、第二次世界大戦における麻薬の役割がドイツで注目されているが、そこでは主に阿片・モルヒネとペルヴィティンが主な研究対象であった。しかし、本論で明らかにしたように、第二次世界大戦期の日独関係においては、国家による一元的な統制の下、コカが直接交易されていた。独亜関係においては連合国軍による海上封鎖にも拘わらず、「満」独阿片交易の他に、日独コカ交易も行われていたのである。いわば第二次世界大戦中、ナチス・ドイツと日「満」間で麻薬交易が行われていたのであった。

* 本論は、平成28年度～29年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究・代表）課題番号（16K13338）の交付による研究成果の一部である。